

33  
471

M

宗  
教  
統  
一  
全  
工  
富  
久  
吉  
著

014110-000-8

33-471

宗教統一

工富 久吉/著

M39

ABB-0383



33

471

Ⓜ

宗  
教  
統  
一  
全  
工  
富  
久  
吉  
著

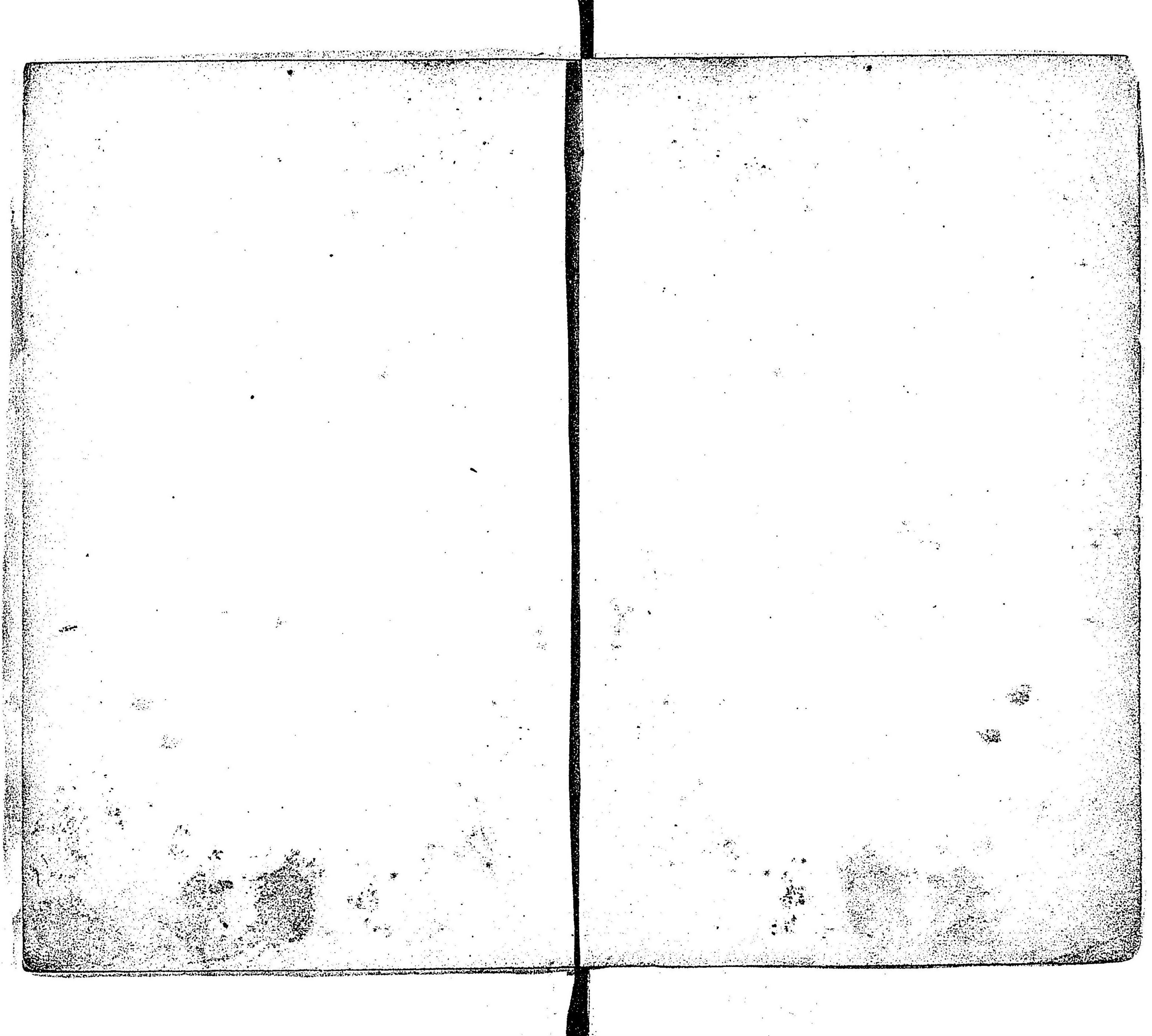
A GUIDE TO SHINTOISM.

33

471

宗教統一

全



京都府第二  
中學校教諭  
工富久吉君著

宗教統一

全

東京  
史傳編纂所上梓

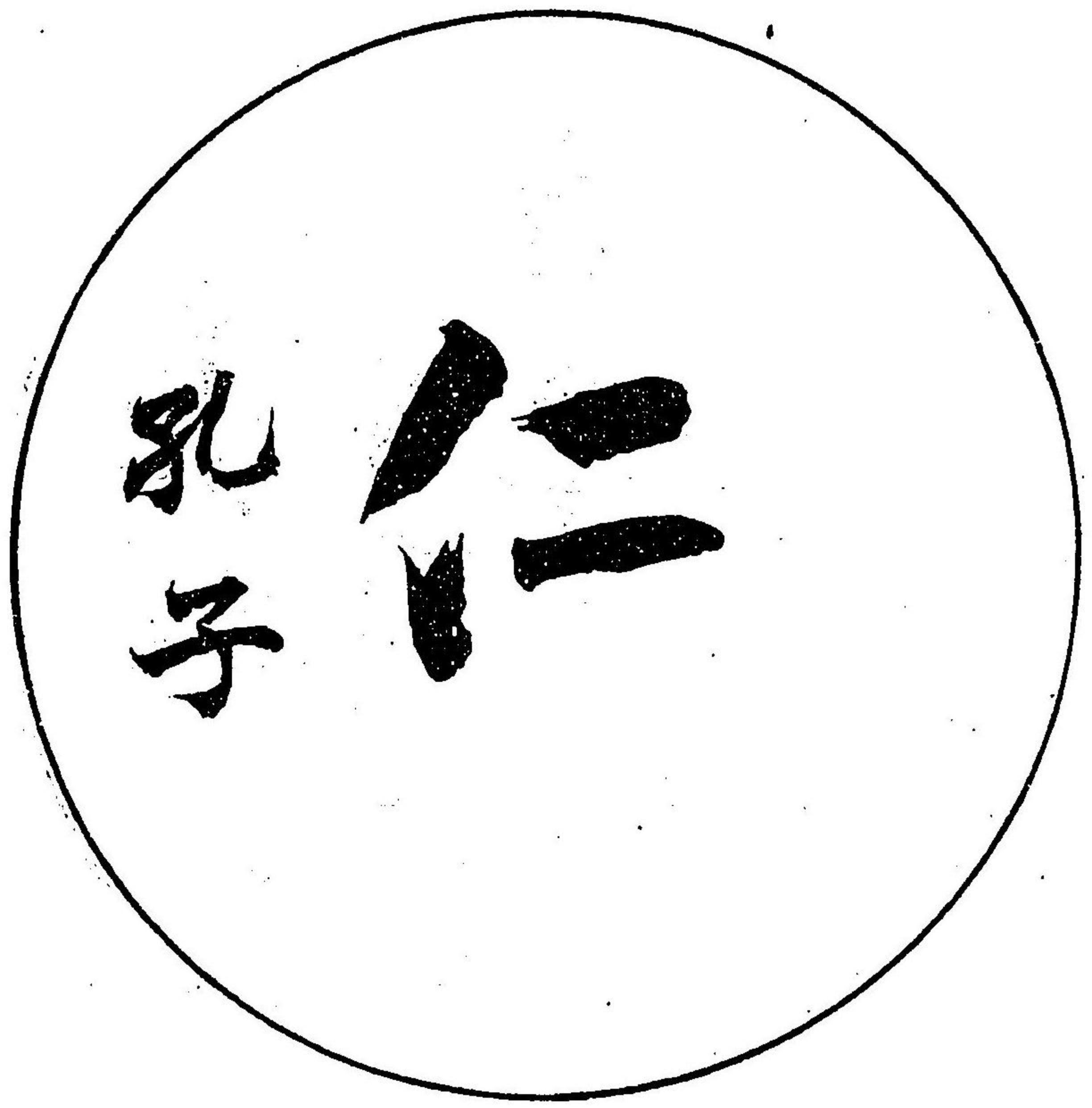
明治

39 6 14

内交

鏡  
玉  
劍





神乃  
あふま  
傳へ  
み  
阿ま  
は

愛  
耶蘇

君か  
多か  
道  
ちの  
の  
ひ



慈悲  
釋迦

毎一  
道を  
所々  
身は  
す  
心  
如

君の

多は海の利

討死

妻子をば

やうなひと

二挺

今此

世亦

萬古君臣守太初

一新内外帰皇化

大國隆正

予齡十歳前後の時が家とホーム  
と思へり二十歳前後は時わが  
国哉ホームと思へり三十歳前後の  
時が世界とホームとおもへり四十に  
近づくに及びてわが宇宙上下四方を  
右往左来  
ホームと思ふに到るぬ

著者 やまもと 志おぢ 氏

序

我が國民の歐西諸國と交を開くや其の我れに足らざるもの、  
物質的文明に於て著しきを見競ひて彼れの醫藥兵制器械工藝  
等を輸入し之と共に所謂科學に關する著述は滔々として我が  
國に瀰滿するに至れり是に於て物質以外所謂形而上の學の如  
きは一時人の顧みる所とならずあらゆる信仰は迷信として排  
斥せらるゝの傾向ありき然れども人は永く肉の糧のみに由り  
て満足するものにあらず必ずや亦靈の糧を要求するものなり  
果然三五年來我が國の思想界は哲學宗教等安立の爲めの研究  
と信仰とを要求すること切なるに至れり近時是等の著書の漸  
く多きは此の傾向を證するものなりと云ふべし

姻戚工富久吉君は好學篤信の士なり二十年來宗教問題に就き

て思を潜め深く自ら得る所あり十餘年前余君と東京に會するや君告ぐるに宗教統一の事を以てし堅く自ら信ずる所あるものゝ如くなりき余乃ち君に勸むるに之を書に筆して世に公にせんことを以てす當時余の之を告げたるは單に一時の注意に過ぎざりしが君は深く此の言に感じ爾來十年研鑽更に精を加へ此に本書を公にするに至れり余は未だ此の書を精讀せざるが故に君の學說と所信とに就きては言を挿むの權利なし然れども君の如き好學篤信の士が苦辛の餘に或れる著書が尋常一様なる賣文者流の撰と自ら異なる所あるべきことは信じて疑はざるなり、

冀くは苟も心を我が國の思想界に寄せ宗教哲學等の研究を以て物質的文物の缺を補はんとする者若くは各自の安立問題に思慮を回せるものは宜しく此の書を一讀せんことを余豈に敢て此書の所說に盲従すべしと曰はんや學說所信の異同は其間ふ所にあらず只前記の要求を有する者が之を讀まば必ず参考たるべき所あらん余は宗教に就きては門外漢なり然れども此の書の成立と多少の關係あるを以て著者の望に従ひ敢て一言を卷首に弁す

明治三十七年三月十二日

高島平三郎

この小冊子よ、一千万部を印刷して、普く皇國の家々に頒ち呈せんと欲せしむ、無慮幾百万圓の資金を要し、俄かに予が力の及ぶべきにあられば、已むを得ず價を定めて、賣弘むることゝはなしぬ、内にしるせるは、皇國の大いに、わづかに糸筋ばかり世に残りて、たゞまことならぬ他の國の道々のみ、はびこりにはびこれるは、いかなることにかと、予も私かに思ふ節なきにしもあられば、かくはあげつらひて、世に出せるなり、忙はしき業務の傍にものせることゝて、尙ほ稿を改めたき箇處多かれど、心にもまかせず、恐くは誤謬の點も多からん、讀む人幸に之を察せよ、事繁き世にあれば、何人にも閲讀の勞あらせじとて、極めて簡約を旨とせり、されど空論は固より世に益なし、予は有徳の士が、速かに模範會堂を建設して、斯の道を天下に弘むる實を、示されんことを希望するや切なり、

著者しるす、

### 宗教統一序

今や世人が、在來の宗教に満足すること能はずして、科學并に哲學と衝突せざる、一眞宗教を得て、安心せんと渴望する聲は、到るところに高まりぬ、豈これ世界最高の眞宗教が、世に明かなるべき機運の、近づけるを示すものにあらずや、夫れ人類ありてよりこの方、世に宗教と稱すべきもの、現はれたるは、無慮幾十種の多きに及べりと雖、畢竟皆發達の階段にあるものに過ぎずして、佛耶兩教が、それ等の最上位にあることは、何人も之を否まざるものゝ如し、而かも尙ほ、世人は多くこれ等の教に満足すること能はずして、別に求むるところあり

るは、思ふに更に最高の眞宗教ありて存するもの、未だ世に明かならざるに因るなり、然らば其最高の眞宗教は、果して何處にありて存せるか、曰はく東洋日出の國にありて存せり、近時西洋にても、見識卓越の士は、頗る東洋の宗教を研究するに到れるは、決して偶然のことにあらざるべし、

抑も佛教は、釋迦二千餘年のいにしへに生れて、之をかの印度に説けるところ、基督教も亦二千年に近きいにしへ、耶蘇猶太に生れて、その附近を教化せしものあり、之を今日に採らんと欲せば、宜しく各教祖が世に現はれたる當時の境遇を考へて、直ちに光明赫灼として蔽

ふべからざる、彼等の心靈を洞察せざるべからず、科學の進歩著しき今日より、創世記、須彌山説等をひきて、佛耶兩教を非難することの不可なるは云ふまでもなし、されど佛教徒と稱し、耶蘇教徒と稱する人々にして、往々その教祖の心を解せず、皮相の末に拘泥し、甚しきは互に相反目疾視し、議論徒らに多くして、實行殆んど修らざるものあり、況んや兩教更に幾多の宗派に分れ、門末互に相誹謗し、頑冥固陋に加ふるに、私利我欲の情を以てし、謂はゆる獅子身中の虫となれるも少からずと聞く、釋迦と耶蘇とを九原に呼起して、試にこの有様を目撃せしめなば、恐くは相携へて、共に袖をぞ絞るなる

べし、

孔子死を説かず、怪力乱神を語らず、争論之によりて少しと雖も、尙ほ且つ學者派を立て、争ひ、時としては則ち、論語讀みの論語知らず、天下に満ち溢るゝ、ここもありとかや、希臘のむかし、ソクラテス<sup>ソクラテス</sup>が白晝に燈火を點して、市中を往來せりと傳ふるも、強ち奇とするには足らざるなり、歴史を閲するに、此の如き暗黒世界は、古來決して少しとせず、

然るに明治の大御代も、三十餘り六とせを経て、万機漸く熟し、徳化漸く行はるゝにつれ、宗派の争ひも夢の如く消に去り、各自に其迷へるに心づき、靈界の太陽は赫

々として、明かに人の心を照らさんとするに到りぬ、誰か知る、世界最高の眞宗教は、數千年獨り皇國の民にのみ、其徳澤を及ぼし、が、今や世界に其光明を放ちて、幾多の宗教は皆之に歸一すべき機運に近づけることを、予はこゝに天地神靈の旨を奉じ、謹みて宗教統一の要義を著はし、其然るべき所以を述べんと欲す、併せ録するところの無名會は、即ち之を空論に留めずして、實際にすべき方法を明かにせるなり、之を序となす、

京都教王護國寺の畔、其むかし大君と名づけられし地の、字を教閣といへりしといふところに筆をとる、

明治三十六年七月

行齋 工富久吉

佐久間象山翁曾て曰はく予年四十以後乃知匹夫有繫五世界と、  
 其の意氣想ふべしされど尙ほ宇宙を内と思ふの氣象に及ばざ  
 るや遠し翁は曾て世人の心竅豆よりも小なりといひて人を笑  
 ひたれども爾はゆる五世界も之を宇宙に比すれば亦豆の如く  
 小なることを知らずして自貢の念ひとへに高かりしこそ悲し  
 けれ英雄といへども神を知らずんば其心事尙ほ圓満無窮の域  
 に達すること能はず人は皆神を知りて之に合体せまほしきこ  
 とになん

# 宗教統一

## 目次

第一章	富士山上の問答	一頁
第二章	皇國の使命	四頁
第三章	天地の神靈	六頁
第四章	君臣の大義	十四頁
第五章	多神教と一神教	十八頁
第六章	萬物一体	二十一頁
第七章	神を知らざるものは博愛の情全きこと能はず	二十五頁
第八章	神の愛と父母の愛	二十九頁
第九章	佛教	三十五頁
第十章	儒教	三十八頁
第十一章	耶蘇教	四十四頁



第十二章 くさぐさの教に入るなくさぐさの教を容れよ……………四十九頁

第十三章 世界の平和は必ず皇國より起らん天國と淨土とは必ず皇國より始まらん……………五十二頁

第十四章 天命……………五十六頁

第十五章 時事偶感……………五十九頁

第十六章 實行……………六十二頁

第十七章 無名會……………六十六頁

奉告文……………六十八頁

宗教統一の歌……………七十頁

勸誘書……………七十二頁

無名會趣意并に規則十ヶ條……………七十六頁

無名會の歌并に曲譜……………八十頁

五十鈴川の歌……………八十一頁

附四十八字歌五首……………八十七頁

# 附 録

神道無名教會を設立するに當り檄を作りて  
同志を天下に求む

かけまくも畏き宇宙の神靈は之を視るに見えず之を  
聽くに聞えずといへども常に生々營々の徳を備へて  
万物化育の道を行ひ玉ふ天祖天照す皇太神を始め奉  
り天津日嗣知らしめす代々の天皇高御座に在まして  
祭事をこらせられ億兆の蒼生之に則りて安く萬物之  
に順ひて其の命を全くす嗚呼これ神道にして皇國古  
來の大道にあらずや而して人は實に神靈に通ずる知  
恵と化育を佐くる能力をうけて生る然れども私欲

二  
の念に偏し私利の情に僻するが故に知惠曇り能力失  
せ罪惡殃禍交も生ずるに至る心を静かにして世道人  
心を觀察するもの誰か之を憂ひ且つ悲まざらんやか  
の釋氏は佛に祀することを説き儒者は天に事へまつ  
ることを教へ基督は「ゴツド」に歸依することを勸む皆  
神靈を敬する所以にして其の經典を讀むに時に應じ  
處に隨ひて固より取捨すべきなきにあらずといへど  
も多くは皇國の大道に戻らず宜しく之を容れ用ゐて  
教の資とすべきなり蓋し敬神の道明かにして後に忠  
孝の義顯はれ教化の基礎定まる然るに世人往々我が  
國体を論じて教育と宗教とを混すべからずとなすは

畢竟皇國の大道は實に世界無上の宗教たることを認  
識せざるがゆゑなり夫れ宇宙の神靈を信仰せずして  
道徳を説くは君父を尊敬せずして忠孝を談ずるが如  
く宗教に基づかざる教育は源なき水と根なき草とに  
譬ふべしされば予今機運を計りて五千萬の同胞と共  
に神道無名教會を設立し皇國の大道を明かならしめ  
あらゆる宗教を統一し遂に福音を萬邦に頒ちて普く  
人類の信念を一にせんと企畫す嗚呼耶蘇教國も頼む  
に足らず露西亞の暴戾を見よ佛教國も頼むに足らず  
印度の興亡は如何更に列國人情の厚薄と道義の深淺  
を比較せば世界に於ける皇國の使命自ら定まれる

あるを知るに難からざらん勤めざるべけんや勵まざるべけんや來れ同感の人々よ予は喜びて共に神意を語らんと欲するなり征露の事方に急にして舉國皆之に力を盡さざるべからずといへども道を講ずるの事亦一日も之を忽せにすべきにあらず嗚呼五千萬に垂んとする同胞の人々よ願はくは予が同志を天下に求むるの深きを察せよ

天地の神を敬ふこゝろこそ

誠の道のもとぬなりけれ

明治三十七年三月

京都市上京區下立賣通鳥丸西入 工富久吉敬白

# 宗教統一

## 第一章 富士山上の問答

去年の夏、富士山に遊び、三人の伴侶を得たり、暴風雨に遭ひ、石室に籠りて、晴を待つこと數日、無聊に苦みて、或は詩歌を作り、或は談笑を恣にす、時に一人、從容として予に向ひ、問ひて曰はく、聞く子は學校の教師なりと、以て生涯の業務とするか、將た他に爲さんと欲するところあるかと、この問直ちに予か肺腑に徹せり、即ち徐ろに答へて曰はく、予は夙に宗教統一の理を世に明かにせんと、の宿志を有せりと、問ふ人笑ひて曰はく、子何ぞ自ら計らざるの甚しきや、夫れ一宗を明かにするも、人間畢生の業として、古來至難の事と稱するにあらずや、子能く既に耶蘇教を明かにせ

るか、佛教を明かにせるか、儒教を明かにせるか、回々教は如何、天理教は如何、と予も亦笑ひて、他日辨解するところあらんことを期し、話頭を他に轉じ、談笑以前の如くなりしが、風雨は更に歇まず、其の夜も石室にいね、八月六日に及び、遂に満天の快晴に遇ひ、日出稀有の美觀を見て、世界億兆蒼生の爲めに、萬歳を祝し、既に山巔に達するや、謂はゆる千古の雪を踏みて逍遙し、一万二千尺の高地に、優遊半日を消し、

みわたせば、十三州は、ふもとにて、

かすみの外に、支那魯しや見ゆ、

もとむれば、道はありけり、空高く、

秀づる富士の、みねのうへにも、

見れごなほ、みあかぬものは、萬代の、

富士のかめいは、三日月のうみ、  
 など詠じつゝ、四人手を携へて、其夜東都に歸りぬ、歸來自ら謂へらく、かの釋迦、孔子、耶蘇等の世を憂ひ人を教ふる、豈數十年の研究をまちて、始めて悟り得るが如き難事を以てせんや、孔子曰はく、道は近きにありと、又曰はく朝に道を聞きて夕に死すとも可なりと、道の悟りやすき以て見るべからずや、釋迦と耶蘇との人を教へたるも、後世學者哲人と稱せらるゝ輩の、議論百出、千言万語尙ほ足らずとして、人をして彌惑ひ、益苦ましむるが如くならんや、大聖の言行實に簡と要とを極む、末流の學者、博引旁証、議論徒らに精しくして、實行漸く迂きは、歎きても尙ほ餘りありといふべし、この弊を救はんと欲して、苦心焦慮、今やこの書を著はして、富士山上の問者に辨解し、并せて江湖の注意を惹起せんとす

るに到れり、

四

## 第二章 皇國の使命

淵に臨みて魚を羨まんよりは、退きて網を結ぶに如かずとかや、口に四百餘州を蹂躪せん、五大洲を併呑せんなど、稱へて、快とせしは昔の夢なりけり、今や四千餘万人、心を一つにして、身を修め業をはげみ、皇國の徳風を發揚し、世界の民をして、一齊にその下風に靡きて、欣慕措くところを知らざるに至らしめざるべからず、道德振興すべきなり、体育獎勵すべきなり、諸種の藝術講究すべきなり、農工商の業改良進歩せしむべきなり、されどこれ等の根本となりて、各人の精神を安靜ならしめ、各人の元氣を奮起せしむべきものは、唯道あるのみ、既に數十年のいにしへに於き

て、本居宣長翁は、

なみならぬ、時とし知らば、日本の、

道たしたてよ、心あるひと、

と詠せり、獨り宣長翁のみにあらず、國を思ひ世を憂ひて、或は事業に、或は著書に、其の熱情を迸出せるは、古今その人に乏しからず、而かも眼を放ちて、普く同胞今日の狀態を察するにかの、しき島の、大和心を、人とは、

あさひに匂ふ、山櫻はな、

といへる如き、高潔なる心の、未だ國內に普からざるを思へば、誰が感慨の胸臆に満ち溢れざるものあらんや、明治第二の維新は、之をわれ等が精神上に實現せしめざるべからず、而して精神上の維新は、必ずや宗教の明がなるに基つがざるべからず、嗚呼四

五

千餘万の同胞兄弟よ、願くは共にこの宗教を研究して、神明に敬事する道を明らめ、道德法律の標準を定め、教育の根本を立て、之に依りて身を修め、之によりて業をはげみ、体育を奨励し、藝術を講究し、農工商の業を改良進歩せしめ、謂はゆる天國と淨土とをこの國に現出し、地球上億兆の蒼生をして、傳へ聞きて驚嘆し、仰ぎ見て敬服し、徳に懷き、風に化し、長へに皇恩に浴せんことを希ふに至らしめんは、豈皇國が世界に立ちて負へるところの使命にあらずや、いでや予をして暫く宗教につきて述ぶるところあらしめよ、

### 第三章 天地の神靈

世に法律とて、諸々の制度を定め、罰を設けて、人に罪惡を犯さゞ

六

らしめんとするあり、道德とて、人の由りて行くべき道を示し、人の身に得べき幸福を享受せしめんとするあり、其の上に宗教といふありて、天地の神靈を知り、之に敬事する道を教へ、人をして心を安んじ命を樂しむことを得しむ、何をか天地の神靈といふぞ、曰はく眼あるものは必ず太陽を見ん、心あるもの如何ぞ天地の神靈を知らずといふことを得べき、若し太陽を見ること能はずば、これ盲目せるなり、若し天地の神靈を知らずば、これ喪心せるなり、基督教には之を「ゴッド」といひ、佛教には之を阿彌陀といひ、儒教には之を天といふ、存其心、養其性、所以事天也、とは儒者のいふ所にあらずや、假りに其形を人にして、身に光明を放たしめ、之を尊崇し、之に敬事するは、佛徒のなす所にあらずや、父よといひて之に禱り、主よといひて之に俯伏するものは、耶蘇教徒にあ

七

らずや、而して釋迦、孔子、耶蘇、彼等自身といへども、一に皆この心をもて、天地の神靈に對したり、されば太陽を見る能はざるものは、退きて其眼を療せよ、天地の神靈を知る能はざるものは、靜かに其心を修めよ、苟も一たび心眼を開きて、天地の神靈をみとむるを得ば、道德も法律も、皆この神靈の旨に基づきて、生ずること、を解し得ん、この神靈の旨に戻るものは、之を不法といひ、之を不徳といふ、故に宗教既に明かならば、完全なる道德、完全なる法律は、自然に之より湧きいつべきものにして、宗教の尊きゆゑんは、即ちこゝにあるなり、

天地の神靈之を靈火といふ、人の精神之を賜火といふ、天地の神靈より賜ひし火との意なり、思ふに、下等動物も、皆多少の賜火を享有すれども、人の享けたる賜火を、尤も靈明なりとす、されど、ある人の、

みがきての、後こそ光れ、みがゞずば、

玉もかわらに、なにかはるべき、

と詠ぜし如く、物欲の迷雲之を覆ふにより、聖人より以下は、學びて知を致し、よく其心の玉を磨くにあらざれば、禽獸と相去ること遠からざるぞかし、世間往々其子を愛することを知りて、毫も其他を愛することを知らざるものあり、これ禽獸と何の異なる所ありや、形は人なりといへども、之を眞の人と稱すべからざるなり、故に人は必ず宗教によりて、天地の神靈を知り、よく之に敬事して、自ら慈悲仁愛の道を行ふに到らざるべからず、乞ふ試みに比喩をもて、天地の神靈を説き示さん、

今や予が職業は、學校の教師なれば、暫く之を學校の校旗に喩へ

十  
ん、夫れ校旗を正式に押出すにあたりては、學校長を始め、教師生徒門衛給仕に至るまで、皆之に敬禮するなり、これ何の故ぞや、蓋し校旗は學校其もの、精神を代表すればなり、校長の學校に對する精神、教師等の學校に尽す精神、生徒の専心勉強して生徒たるに恥ぢざらんとする精神、門衛の門を衛る精神、小使の其職を勤むる精神、皆集めてこの校旗に表彰せらる、さればこの校旗に含める精神は、直ちに學校の精神にあらずや、天地の神靈は即ち天地の精神なり、耿々として明かなること日月の如く、十方三世に遍滿して、在さざる處なく、在さざる時なし、萬物の生々榮々、悉く皆この力による、かの春の花の樹頭にのぼるも、秋の月の水底にしづむも、何れか神あることを推知すべき種ならざるべき、試みに省みて、自己身体の構造發育を考察しても、神力の如何に崇

高にして驚くべき、敬すべきかを知るに餘りあるなり、この自ら知る力といへども、固より神靈の一部分たるを免れず、耶蘇教に「オールマイデー」と説けるは、之をいへるなり、人苟もこの神靈を体認し、この神靈に敬事するに至らば、如何ぞ人の知らざるところとて惡事を行ひ、人の見ざるところとて醜行を逞くすることあらんや、如何ぞ他人なりとて之を疎んじ、惡人なりとて之に敵するが如き、狹量の念を生ずることあらんや、宇宙上下四方皆わが一体なり、天地の神靈敬すべく、我と之れと皆愛すべし、已むを得ざるに殺し、已むを得ざるに罰す、毫も人を惡み物に敵する心あるにあらざるなり、嗚呼敬神は誠に皇國固有の大道なり、幸に生を皇國に享けたるもの、いかにぞ天地の神靈を知らずといひてあるべけんや、尙ほ一言せんと欲するは、宗教といふ語の定義な



り、  
 夫れ宗教といふ語の定義に就きては、内外共に學者間に説多きことなれども、今日一般に英語の Religion を宗教と譯し、Religion の語原は、神と人とを結び合はすとの意、宗教の二字は「モトツチシヘ」と訓釋すべき語なりと聞く、而して古より忠孝を教の本とすれども、天地の神靈を知りて之に敬事するは、更に其大本といはざるべからず、故に Religion を宗教と譯するは、即ち神と人とを結び合はずは教の本なりといふに均しくして、尤も其當を得たりといふべし、されば宗教は、實に政治及び教育の根本なるべきものにして、宗教に基づかざる政治、宗教に基づかざる教育は、到底完全なる政治、完全なる教育たること能はざるや明かなり、昔時は天子獨り天地の神靈に敬事し玉ひ、神に代りて天が下知るしめ

し、万民は直接に神靈に敬事することを須るず、たゞ天皇に敬事すれば足ることなりしかば、祭政一致、政教一致等の語もありたれど、今日にては、人々皆共に、天地の神靈に敬事し、併せて天皇に敬事し、父母に敬事することの、尤も可なるをみとむるなり、應神天皇の御靈を、八幡神社に祀り、菅原道眞公の靈を、天満宮に祀るが如きは、其在世の時に當り、或は胎中に三韓を征討し玉ひし武徳あり、或は達識英才の尊崇すべきありたるを敬し、人々長へに其威靈を仰ぎて、其徳化を蒙らんことを希ふが爲めなり、すべて天地の神の分靈にして、謂はゆる賜火の大なるもの、之を天地の神靈と同一視すべからず、喩へば天地の神靈は、大海の水の如く、これ等個々の分靈は、沼湖河流の水の如し、同じく水なりといへども、沼湖河流の水は、大海の水の一部分、空中に上昇して雨雪と

なり、地面に下降して一時の流れ又は溜りをなすに過ぎず、須臾にして大海に歸入するか、再び空中に上昇するを免れざるなり、三界の万靈均しく一大靈湖より分れ出で、暫く箇々の形体に宿り、或は愛惜の情に溺れ、或は互に自他の見をなすは抑も迷へるにあらずや、故に悟れるものは曰はく、有神無我、曰はく至公無私と、深くこの理を考ふれば、人々天地の神靈を感得するに於きて、必ずや思ひ半ばに過ぐるものあらん、あなかしこ、讀む人願くば之を熟慮して、天地の神靈に通じ、至公無私の境に遊び、上下徳を一にして、相樂まんことを期せよ、これ即ち眞に其命を立て其心を安んずる所以の道にあらずや、

#### 第四章 君臣の大義

儒者の教に曰はく、君君たらざるといへども、臣は以て臣たらざるべからずと、而かもこの教の眞に實行せらるゝは、世界中皇國を外にして何處にありや、支那にも獨夫の紂を誅することを聞くと公言し、歐米には自主自由の外に道あることなしといひ、印度の如きも亦古より烏合の集族にして、君臣の大義絶滅せること其始めよりして既に然り、獨り我が神洲、日出の處に國を建て、この道未だ曾て壞れず、天壤のあらんかぎり、は榮えんと、天祖の御詔勅は、太陽と共に明かに其光を放ち、三種の神寶に寓せられたる尊き御遺訓は、皇室の億兆臣民に對し玉ふべき法規として、永久に天津日嗣の御位と共に傳はり、臣民も亦之を仰ぎ、之を望みて、帝の則に従はんことを希ふ、一朝君君たらざる時に遭遇せば、臣たるもの宜しく生命を抛ちても、之を佐け奉りて、君徳の

欠けざらんことを祈るべきのみ、又他意あるべけんや、これ即ち忠義の道にして、若し國に逆賊あらんとき、身を以て之に當るも亦この道に外ならず、生あれば必ず死あるべきものを、徒らに疊の上に腐れ死なんよりは、この道の爲めに盡して、命を君國に致すは、古より神洲男兒の榮とするところ、かの海ゆかばみづくかばね、山ゆかば草むすかばね、大君のへにこそ死なめ、かへりみはせじ、のごには死なじ、といへるも忠義の心の溢れて言にあらはれしなり、この心を以て平時に處す、故に其徳の進み、其業の成るや、万邦を驚倒せしむべきものあるなり、この心を以て戦時に處す、故に敵を破り、仇を亡ぼすや、鬼神も面を向くること能はざるものあるなり、國風旣にかくの如し、故に一國恰も一家の如くにして、風俗彌純良に向ふ、これ實に皇國國体の萬國に優れて尊き

所以にして、皇國は建國の始めより、文字の憲法なかりしと雖も、三種の神寶によりて、其實旣に已に無上の立憲君主國たりしなり、憲法發布の容易なりしこと、他國に其例なきも、豈怪むに足らんや、かゝる尊き天皇を戴ける人民の幸福が、如何に高大なるかを思ひはからば、世界の國々が終に一つとなりて、この天皇の統治を受け、この天皇の恩澤に浴せんことを希ふに到らんは、火を見るよりも明かなりといふべし、昔時耶蘇教の起るや、唯殘忍暴戾の王あるを知りて、未だ曾て此の如く神に代りて、天が下知ろしめすべき、大君あることを知らず、故に神に事ふる所以を説きて、君に事ふる所以を説かず、佛教は暫く之を措き、儒教とても、實際に斯かる大君あることを知らざるが故に、君臣の大義を顧みざる章句文字、往々にして經典の上に現はるゝあるを如何にせ

ん、孟子が書を読み悉く書を信ぜば、書なきに如かずと自ら明言せしは賢なりといふべし、經典の文句なりとて、之を死守するは却りて聖賢の旨にあらず、時に取捨活用の道なかるべからず、嘗て聞く獨乙の「ヘーゲル」は世界一統の君主制を以て、國家の理想となせりと、而して學者多くは之を實行すべからざる空想となせり、予は「ヘーゲル」をして、世界に皇國あることを知らしむること能はざりしを遺憾とするなり、

### 第五章 多神教と一神教

天地神祇八百万神と並稱すれども、八百万神は固より天地神祇の分靈のみ、合して之をいへば即ち一神となる、或は多神教といひ或は一神教といふ、其名異なりと雖も、實は大差なし、そは神道

と耶蘇教とに於けるのみならず、佛教儒教といへども、天地の神靈に對する觀念、皆自ら相契合するを見るは、人の思想が古今東西、互に相均しきものたるを証するに餘りありといふべし、皇國は上古より、天地神祇八百万神を祀れり、而るに儒佛耶蘇各教を傳へ來りて、詳かに之れを考察すれば、何れも其歸を一にするは妙なりといふべし、佛教に阿彌陀を念ずるを見よ、神道に天地神祇八百万神を敬すると似たらざるや、阿字十方三世佛、彌字一切諸菩薩、陀字八万諸聖經とは、誰か解釋しつらん、誠に其要を得たりといふべし、十方三世佛とは、即ち十方に遍ねく、三世に満ちて、在さざる處なく、在さざる時なき、天地の神靈を指していへるなり、一切諸菩薩は、八百万神に相當し、八万諸聖經は諸菩薩の聲をいへり、但し八百万神の内には、古來世に尊崇すべき人々を始

めとし、禽獸虫魚、山川草木、さては水火の如きに至るまで、皆神として數へ入るゝを稍異なりとすれども、佛敎にも國土山川、悉有佛性、禽獸草木、悉皆成佛の說あるを見て、兩者の極めて相近きを知るべし、耶蘇に「ゴッド」と稱するは、十方三世佛のみを指していへる如くなれども、基督を「ゴッド」の出現なりと説くを見れば、亦佛說に近きを知るべきなり、儒敎に天を説けるは、其意や、漠然として、一定せざるが如くなれども、或は神明といひ、或は鬼神といへるを考ふるに、大体に於きて思想の類似せるは、毫も疑ひを容るべきにあらず、本居宣長翁が、

釋迦孔子も、神にしませば、その道も、

ひろけき神のみちの枝みち、

と詠ぜられしは、誠にさることなり、又聖徳ある儒者の天に事へ

たると、基督の「ゴッド」に事へたるとを比較せよ、兩者共に、孝子の父母に事ふるに均しきこと、恰も符節を合するが如きなり、釋迦慈悲を教へ、孔子仁を説き、耶蘇愛を勸む、各敎祖の意、時に應じて深淺厚薄なきにあらずといへども、一つに何ぞ相類似せるの甚しきや、予は未だ發達の程度低き諸宗教を知らざれども、恐くは皆彷彿として、天地の神靈を求むるに近きものあらん、其誤れるは之を正し、迷へるは之を導きて、遂に必ず一つに歸せしめざるべからず、

## 第六章 萬物一体

語に曰はく、仁者は天地萬物を以て一体となすと、實にや世の始めより、世の終りに至るまで、萬物の生々榮々、死々滅々して、更に

已まざる状態を観察するに、百川の流れくゞて常に海に入れども、何時の程にか、また其源にかへり、再び流れて海に入り、循環して萬古に已むとなきと、毫も異ならざるなり、孔子が幾度か、水なる哉、水なる哉と、嘆ぜられしは斯るさまにも心づき玉ひしならん、熟ら思へば、一体の物質(Grat ocean of being)と、一体の神靈(Grat spirit of eternal life)と、暫く集散離合して、森羅萬象の變々化々となり、世の終始をなす、世の終るや、萬象萬靈悉く合して一体となり、世の始まるや、漸く又分類を生ず、一終一始、輪轉やむときなし、生滅二力あるにあらずんば如何ぞこの變化を爲さんや、されど、この二力合しては一となり、分れては二となり、混じては千万無量となる、世始まり分類の道進み、森羅萬象こゝに成立するや、個々の靈個々の物質に分配せられ、互に自他の見をなす、動植礦三門皆其靈の

配當を異にせり、動物の享くる靈を賜火と稱し、尤も靈妙なり、人の生ずるに及びて、漸く其極に達し、殆んど神靈に通ず、萬物一体たること、何の疑をか容るべき、動物の互に相殘ひ相害し、強は弱を食ひて、自ら肥やすことをなすは、己れ其身を屠りて食ふに異らず、悲むべき極みといふべし、植礦二門の如きは、靈性の宿ること、動物と同じからず、機械的能力あるも、知覺神経系統を備へず、故に之を破壊するも、之を斬り枯らすも、毫も苦痛を感ずるものにあらず、之を人身に譬ふれば、爪と髪との如きのみ、動物は宜しく植礦二物を取りて、其身を養ひ、其生を全くすべきなり、互に相吞噬するは、愚の極みといはざるべからず、然れども、蛇や蛙を呑み、猫や鼠を噬み、生物の状態自ら弱肉強食の習性を脱すること能はず、實に悲痛の感に堪へざるなり、これ豈獨り仁人ありて、

之を悲むのみならんや、天地の神靈も、之を悲み玉ふや一なるべし、夫れ神靈の能力は洪大無邊にして、生々榮々の道によりて以て營まれ、之を萬物の父母と稱するは、固より其ところなりと雖も、而かも尙ほ其能はざるあるを免かれざるは如何にかせん、今もし吾人の兄弟に盜跖五右衛門の類生れたりとも、吾人は之を以て父母を怨み、父母を咎むべき理なし、必ず父母と共に之を悲みて、及ばん程は其罪惡を救ふべき方法を講せざるべからず、予幼時謠曲三輪を讀みて、

千早振る、神も願の、あるゆるに、

値遇の人に、あふうれしき、

といへる歌を見るに及び、卷を掩ひて感歎之を久しくせしことありき、嗚呼万物一体の理、仁者にあらずんば、誰か能く之を体認

することを得んや、

## 第七章 神を知らざるものは、博愛の情

全きこと能はず

生々榮々は神の力なり、よくこの力を体認して、其偉大なる徳に服し、之を敬ひ之に事へ、日常の行爲悉くこの偉徳に合すれば、愛の理油然として内に生ず、火の燃ゆるが如く、泉の湧くが如し、道徳を論し倫理を口にすとも、未だこの偉大なる能力を、体認すること能はざるものは、其愛や必ず偏小なるを免れず、夫れ愛の理は物皆之を備ふ、禽獸虫魚といへども、愛の理を存せざるはなし、唯其及ぶところに深淺厚薄の差あるのみ、蓋し已れを愛するは愛の始めにして、子を愛し、父母を愛し、同類を愛し、終によく万物

を愛するにいたる、天下已れを愛せざるはなく、又其子を愛せざるものなし、されどこの愛をおし弘めて、他に及ぼすこと能はず、人も眞に神を体認せざるもの、愛は、禽獸に優ること僅かに數歩ならんのみ、甚しきは已れを愛するに偏して、自ら魔道に陥り、毫も之を自覺せざるも少しとせず、深く鑒みざるべけんや、かの獄舎に入りて苦役に服せる幾多の囚徒も、皆吾人の同胞兄弟たることを思へば、予は爲めに寢食だも安きこと能はず、争てか之を世の常として、顧みざることを得べき、予は又人類が下等動物を殺し、之を食ふことにつきて、淺からぬ感情を有し、齡十五六の時より、斷然肉食主義を實行せしこと七八年なりしが、友人等は皆嘲笑して曰はく、天萬物を人に與ふ、禽獸虫魚を食せざるは、天の與ふるをとらざるなりと、果して予はこの主義の爲めに職務

をさへ失はんとせしこともありき、近頃世に下等動物虐待防止會なきの起れるは、いと喜ばしきことなれども、一般人類は尙ほ競ひて肉食に飽かんとするさま、殆んど蛇猫にもまさり、虎狼にも比すべきをいかにせん、曰はく某州は日に幾百頭の牛を屠る、曰はく某國は日に幾千頭の豕を屠ると、唯其屠ることの多きを誇り、屠ることの多きを羨むもの、如し、之を耳にするも氣枯るゝことならずや、こは基督がかの野蠻時代に出で、人類相愛の道を説くに忙はしく、終に下等動物愛護の道を教ふるに暇あらざりしにより、今日世に優勢を保てる、耶蘇教國の民、愛を物に及ぼすの情に乏しく、已れを愛するが爲めには、毫も他の苦痛を顧みることなく、牛馬鶏豚を屠殺して之を食すること、恰も野の菜蔬を見るが如きなり、而るに善きも悪しきも西洋の風を學びて、



終に下等動物を造化の人に與ふるところとなし、已むを得ざるにより、忍びて之を食する所以を忘るゝに到れるにはあらざるか、我が神は玄遠なり、孔丘孟軻は犬を食ふ夷なりとさへ、痛言せし人もあるを、吾人は猛省一番、神道の本源に溯り、天地の神靈を知り、博愛の情を全くし、其知鏡の如く、其仁玉の如く、其勇劍の如き國風を養成して、以て世界万邦に臨まざるべけんや、孟子は君子の物に於ける愛して仁せずといへり、されど下等動物も、人と同じく天地の間に生じ、神の恵みに育ち、不幸にして智能を享くることの人より劣れるものなり、劣れるものは寧ろ之を憐まざるべからず、かの庖厨を遠ざくる心ありしは、尙ほ人の道に近かりきとやいはまし、

### 第八章 神の愛と父母の愛

張子厚の西銘に曰はく、

乾稱父坤稱母、予茲藐焉、乃混然中處、故天地之塞、吾其體、天地之師、吾其性、民吾同胞、物吾與也、大君者、吾父母宗子、其大臣宗子之家相也、尊高年所以長其長、慈孤弱所以幼其幼、聖其合德、賢其秀也、凡天下疲癯殘疾、惇獨鰥寡、皆吾兄弟之顛連而無告者也、干時保之子之翼也、樂且不憂、純乎孝者也、違曰悖德、害仁曰賊、濟惡者不才、其踐形惟肖者也、知化則善述其事、窮神則善繼其志、不愧屋漏爲無忝、存心養性爲匪懈、惡旨酒崇伯子之顧養、育英才穎封人之錫類、不弛勞而底豫舜其功也、無所逃而待烹、申生其恭也、體其受而歸全者、參乎、勇於從而順令者、伯奇也、富貴福澤、將厚吾之生也、貧賤憂戚、庸玉汝於

成也、存吾順事、沒吾寧也、

三十

嗚呼これ宇宙稀に見るところの好文字にあらずや、心を靜かにして之を思ふに、神の人と物とを愛育し玉ふは、父母が其の子女を慈養すると何の異なる所かあらん、日ありて照らし、雨ありて潤ほし、渴すれば飲むべく、飢うれば食すべく、寒ければ被ふべく、熱ければ浴すべく、四時の好景、山川の絶色、以て慰むべく、以て樂むべきは、父母に均しき大慈悲心ありて、常に吾人を慰籍保護し玉ふにあらずんば、争てか此の如きに至らんや、之を神の愛といふ、愚かなる子女は其の言を謹まず、其行を修めず、父母の名を汚し、父母の心を痛ましむ、これ父母に事へまつる道を知らざるが故なり、人の神靈に敬事するは、その父母に敬事すると、何の異なる所あらん、或る人曰はく、神を重んずれば則ち君を輕んずるに

至る恐あり、耶蘇教徒を見て之を知るべしと、予謂らく然らず、耶蘇が君臣の大義を説くに及ばざりしは、第四章に述べたるが如くなるを以て、耶蘇教徒の内には君臣の大義を辨へざる人少なきにはあらざるべし、さりとして耶蘇教徒の行爲、必ずしも耶蘇の教に合せりとはいふべからず、凡そ何れの宗教にても、謂はゆる教徒と稱するもの、行爲を見て、その教理を非難することの不可なるはいふまでもなし、基督曾て我の外に神ありとすべからず、我の外に何人にも拜跪すること勿れと云へりとは予が聞くところなり、されど基督にして、果して此の言ありしとせば、當時必ず爲めにする所ありて發せしならん、妄りに之を今日に引き、て、君父を輕んぜんとするものあらば、それは基督教徒にして、基督教を絶滅せんとするものなり、思はざるべけんや、夫れ忠臣は孝

三十一

子の門に求めよ、父母に孝なるものは、必ず君王に忠なり、神に事へまつることを知りて君を輕んずるものは、古より未だ曾て之あらず、或る人又曰はく、天地の神靈は誠に大慈悲心をもて、常に萬物を慰籍保護し玉ふが如くなれども、之を一面より觀察すれば、或は猛獸毒蛇の類ありて物を殘ひ、或は虎列刺「ペスト」等の微菌ありて人を害するなど、殘忍暴戾、見るに忍びず、聞くに堪へざる状態は、日々世間に發現して、寸時も已まざるなり、これ神の愛に甚しき矛盾あるに非らずやと、予も久しくこの疑惑になやみしが、この頃漸く氷解して、天地の神靈に事へまつる心、益固くなれり、抑も宇宙間の森羅万象は、悉く神の生々したまふにあらざるはなし、人類を始めとして、禽獸虫魚に至るまで、皆神の慈愛を蒙りて、其の生を遂ぐるなり、然るに猛獸毒蛇あり、虎列刺「ペスト」

諸菌あり、何ぞ唯猛獸毒蛇と虎列刺「ペスト」諸菌とのみならんや、微細の小虫より進みて高等の動物に至るまで、弱肉強食、殘忍暴戾の状態誠に見るに忍びず、聞くに堪へず、吾人は日々之を目撃して、痛歎措く能はざるなり、されどこれ豈憂慮ならんや、亦已むを得ざるに出づるのみ、夫れ不肖の子、不具の孫は父母の好みて生むところにあらず、而かも父母をして、痛心措く能はざらしむるが如き子孫、往々にして生れ出づ、これ亦已むを得ざるなり、耶蘇教に神は全知全能なりと説けり、謂はゆる全知全能とは、一切の良知を集め、一切の良能を合せたるものたるに過ぎざること爰に至りて証すべし、若し全能を釋して、能はざる所なしとせば、忽ち事實との衝突を免れず、天地の神靈萬物を慈愛し玉ふと雖も、力足らず、能及ばず、恰も父母が數多の子を持ちて、教養の道に

苦心すると相似たり、されど其生じたるものは、猛獸毒蛇の如きものと雖も、神は深く之を愛護し玉ふ、唯惡しきものは自ら禍害に近づくのみ、神は之を痛ましくこそ感じ玉はめ、嗚呼世に父母の恩惠を知らざる人はあらじ、君王の恩惠を知らざる人は往々にしてあり、天地神靈の恩惠を知らざる人に到りては、恐くは數ふるに違あらざらん、人より受くるところの一片の恩惠、尙ほ且つ感謝の意を表して、永く之を忘れざらんとす、然るを天地神靈の洪大なる恩惠に對しては、却りて感謝の意なきもの多きは誤れるにあらずや、これ全く宗教の明かならざるに由るなり、禽獸虫魚の如く、不幸にして精神の靈明ならざるものは如何にかせん、幸に人と生れたるものは、父母君王の恩惠を知ると同時に、天地神靈の恩惠を知りて、一言一行其旨に叶はざることなく、日夜

心を盡して神靈に敬事し、其生々榮々の功を佐け奉らざるべけんや、

## 第九章 佛教

帝國大學にて、哲學を講ずる某博士、近年の著書に曰はく、佛教は其旨意茫漠として、理會し難きのみならず、之を理會せんには、一万卷に垂んとする藏經を讀みても、更に其他の佛書幾万卷なるを知らざるが故に、其實佛教は、何人も一生涯に、明らめ得べき性質のものに非るなりと、今若し哲學者の書を讀破せざれば、哲學は解し得べからざるものとせんか、カントをも、ヘーゲルをも知らざりし、ソクラテスは如何にして哲學者たりしぞ、纔かに婆羅門の經卷若干を讀みたる釋迦は、如何にして佛教を明めしぞ、且

つや釋迦が何人も一生涯に明らかめ得べからざる性質の教を以て、衆生を濟度せんと欲したりといはゞ、これ實に釋迦を誣ぶるの甚しきものなり、夫れ大學の講座に立ちて、哲學を講ずる博士にして、尙ほ其佛教に對する觀念此の如しとせば、天下佛教の明かならざる知るべきのみ、道を遠きに求むるの弊といはざるべけんや、又釋迦が妻子眷族の縁を斷ちたるを責めて、佛教は生々榮々の道を杜絶し、死々滅々の域に導くものなりとせり、これ何等の妄言や、由來佛教を厭世教と稱すれども、佛教は唯其當に厭ふべきところを厭へと教ふるのみ、其淨土を説き、成佛を説き、慈悲仁愛を説けるを見るに、絶体的厭世教にあらざるや知るべきなり、釋迦が妻子眷族の縁を絶ちたるは、或は時の階級制度を打破せんが爲めに、或は時の婆羅門教徒に交らんが爲めに、事情

已むを得ざるに出でしならん、後世の佛教徒、その心を知らず、徒らに其形を學び、妻子を養ひ、眷族に交るを修業の妨となし、野に入り、山に隠れ、往々野狐又は天魔の禪に陥り、甚しきは自ら無間の淵に沈み、亡國の賊となれるを悟らざるものあり、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然を経て、親鸞に及び、釋迦の本意始めて皇國に實現せりとかや、實にも王法に従ひ家業を勵み、ひたすら阿彌陀に歸命して、他念あることなかれと説けるを見るに、見真大師の謚號ありたるは、決して偶然にあらずと云ふところ知らるれ、夫婦室に居るは人の大倫なり、徒らに教祖の行爲に泥みて時に應ずる道なきは、却りて教祖の本意にあらざるべし、或は印度の滅亡を以て、佛教の教理に基づけりとなすもあり、これ亦思はざるの甚むきものなり、人心墮落して、滅亡即ち到れるのみ、佛教何ぞ關り

知らんや、誰か支那の退歩せるを見て、罪を佛教に歸するものぞ、  
 喩へば利刀ありといへども用ゐるに其人を得ざれば、何の功を  
 かなさん、其人を咎めずして、却りて罪を利刀に歸するは誤れり  
 といふべし、予今の世に出で、未だ一卷の佛書だも讀了したる  
 ことなしと雖も、幼時より見聞考察せるところに據りて、聊かこ  
 うに所思を述べ、曾て會心の語を耳にせり、曰はく、聖賢千言万語  
 不過是天理而遏人欲、大藏經一部、止得箇去煩惱而入菩提、外乎此  
 者、舉皆封皮帶紐耳、と釋迦孔子をして之を聞かしむとも、必ずや  
 喜びて共に首肯し玉ふならん、

### 第十章 儒教

前章に引用せる、聖賢千言萬語、不過是循天理而遏人欲、外乎此者、

舉皆封皮帶紐耳、といへる語は、實に千万卷の書籍を、一言の下に  
 喝破せる者にして、かの百万經典日下燈といへる語と相並べて、  
 痛快の極みといふべし、中庸に天命之謂性、率性之謂道、修道之謂  
 教と説き、佛徒の見性成佛といへりしも、この性の字は、人に賦與  
 せられたる天理、即ち道理を指したるに外ならず、道理に順ひて  
 行ひ、道理に順ひて樂しむ、毫も其他を願はざるを人の道とす、舜  
 の田野に耕やすや、糲を食ひ草を茹ひ、將に以て身を終らんとす  
 るもの、如く、其天子となるに及びてや、袵衣を被り琴を鼓し、二  
 女左右に侍るに、固より之を有するが如くなりしと、張子厚は  
 存吾順而事歿吾寧也といひ、孔子は朝に道を聞きて、夕に死すと  
 も可なりといへり、儒教を研究するもの、深くこゝに鑒みざるべ  
 からず、顧みて思へば、わが國古より風俗純美にして、道理自ら行

はれ、殆んど經典の必要を見ず、これ上に天日嗣知召す天皇の照臨ましますあればなり、儒佛の典籍傳はるに及び、採りて之を用ゐると雖も、聊か王化の補助とせるのみ、印度にありては、其國既に亡び、支那にありては、革命の亂已むことなく、儒佛の典籍に説けるところ、却りて典籍なき皇國に傳はりて實行せらるゝを見れば、誰か尊崇すべき所以を思はざるものあらんや、近時耶蘇教の如きも、日本に傳はりて始めて活動し、漸く其真相を發揮せんとする現象あるを認む、亦奇ならずや、

或る人曰はく、儒教は上帝の性質と、未來の世界とにつきて、明瞭なる解釋を與へざる故に、完全なる宗教といふべからずと、儒教が上帝の性質を説けるは、稍漠然たるが如くなれども、其天を説けるを見るに、佛耶兩教が「ゴツド」阿彌陀を尊崇せると殆んど大

差なし、謂はゆる未來の世界に就きては、獨り儒教のみならず、佛耶兩教といへども、全く明瞭なる解釋を與へたりといふべからず、靈魂流轉のことは、もと是れ言語の及ぶべき境にあらず、唯比喩によりて、之を類推し得べきのみ、佛耶兩教の如く、強ひて之に明瞭なる解釋を施さんとすれば、却りて異論を生じ、迷信にあらずれば、宗教にあらずとの議をも招くに到るなり、佛徒のあるものが、不立文字と絶叫せしも、偶然にあらず、

孔子曾て子路に答へて、未だ生を知らず、如何ぞ死を知らんと云へり、人苟も生を知了せば、死は自ら明かならんのみ、死は決して言語もて、解釋し得べきものにあらずるなり、或る人曰はく、然りといへども、死後の苦樂を説かずんば、下愚を度すべからざるを如何せんと、予謂へらく、民は道によらしむべし、之を知らしむべ

からずとさへいへば、民をしてこの道によらしむるに、何ぞ必ずしも、解釋し難き立理を談ずる必要あらんや、上位にあるもの道を行ひて神明に敬事し、よく忠によく孝ならば、民の之に化せんこと草の風に靡くが如くならん、上流者道を知らず、學者徳を明かにせずして、國民道德の衰ふるを歎くは、火に入りて燃ゆるを慨し、水に入りて濡るゝを嘆ずると一般なり、愚も亦甚しからずや、夫れ死後を知るの明は、孔子豈獨り釋迦及基督に劣らんや、而かも之を説かざりしは、即ち亦人を教ふる一法たるのみ、乞ふ儒佛、耶蘇、各教徒につきて、其教の利益功德、何れか實際に大なるかを考察せよ、一得一失殆んを比較し難きものあらん、況んや吾人若し、昨日は今日の過去にして、明日は今日の未來なることを思はゞ、死は必ずしも生の後にのみあるにあらず、吾人は死より出

て、死に入ることを知るに足らん、人獸草木何處より生ずるか、彌滅して彌生すること、河水の絶えず流れて海に入れども、海水古より遂に溢れず、河流も亦未だ曾て盡きざるが如きなり、世間往々人の貧富幸不幸を説きて、天道を疑へるあり、されど幸不幸は獨り人のみにあらず、何物か幸不幸の差を免れんや、試みに再びかの水を見よ、或は大河の中流に落ち、洋々として海に入り、或は清泉に湧出して、芳草に注がるゝが如きは、水の幸なるものにあらずや、或は糞土を濡ほし、或は汚泥に混ざるが如きは、水の不幸なるものにあらずや、均しく水なれども、遇にしたがひて、幸不幸の差あること此の如きは、蓋し運なり、澄めば纓を洗はれ、濁れば足を洗はる、水豈好みて自ら濁らんや、其濁るも亦運なり、たゞ善きものは善き運を招き、悪しきものは悪しき運を招く、而して



人は善悪を擇むに意思の自由を有せり、人の運を支配し得べきはこの一途あり、*Virtue and vice are before you; the one leads to happiness, the other to misery.* といへるは至言といふべし、而してこの他は一に天地の大運に任せざるべからず、運は即ち易なり、聖人變易の理に通じて儒道を立つ、苟も眞にこの道によらば、何の迷ふところかあらん、何の安んぜざる事かあらん、儒教は未來を説かざるゆゑに、宗教といふべからずとは、全く無用の評言たるを免れざるなり、

## 第十一章 耶蘇教

耶蘇教徒の中には、往々神を耶蘇教の專有物の如くに心得、我が國の如きも、耶蘇教國となすにあらずんば、終に絶滅を免れざるもの、如くに論ずるものもあれど、耶蘇教なしとて、我が國には

夙に神明を敬して之に事ふる道あり、博愛の道理も自ら人の心に備はりて、儒教來れば之を採り、佛教來れば之を用ゐ、耶蘇教來れば亦之を他山の石となして、其善に與みず、何ぞ必ずしも、耶蘇教のみに歸依せざるべからざる理あらんや、況んや耶蘇教はかの野蠻の域に必要ありて人心を救濟せんが爲めに現はれたる教にして、固より之を以て無上の教とすべからざるは、儒佛兩教といへども亦同じ事にて、吾人は宜しく此等の教を容るべくして、此等の教に入るべきものに非らざる事は、次章にも之を評論せん、耶蘇が人類相互の愛を説くに忙はしくして、下等の動物をも愛護すべき道を説くに疎なりしは、誠に己むを得ざることといふべし、この點に於きては、佛教は遙かに耶蘇教に優れるを見る、我が國歴代の天皇、往々佛教を尊崇し玉ひしこと、決して故な

きにあらざるなり、若し夫れ耶蘇其人の性行に至りては、全く神の品性を備へて、實に人類の模範とすべきのみならず、かの奇蹟と稱する行爲の如きも、恐くは凡慮の及ぶべきところにあらず。りしものあらん、能く野蠻の習俗を變じて、今日の文明に導ける。一大偉力は、固より讚嘆するに堪へたり、されど耶蘇教徒が、神は全知全能にして如何なることも神の力に及ばざることとはなきもの、如くにいひなすを聞きては、之を神を誣ふる言葉なりとするに躊躇せず、何となれば、神の力にして果して如何なる業をも自由に行ひ得べき者ならば、何故にかの布教に盡力して、非命に斃るゝ人々を、救ひ玉はざるか、何故に世の慈善事業に鞠窮盡瘁せる人々の、天死するあるを顧み玉はざるか、何故に世に「ペスト」又は、虎列刺の如き悪疫流行して、慘狀を極むるとき、神の手も

て之を救濟し玉はざるか、一言にして之をいへば、何故に神は、始めより世を黄金世界となし給はざりしか、これ等の疑問に至りては耶蘇教徒自身も、殆んど解すること能はずして、迷信者にあらざるものは、漸く神を疑ひ初むるに至るなり、蓋し後人「オールマイテー」といふ語の解釋を誤まりたるにはあらざるか、予曾て二三の宣教師、又は牧師に問ふに、このことを以てしたるに、一つも満足すべき答を得たることなかりき、甚しきは則ち、神は人が衛生の道を怠れるを戒めんが爲めに、故らに恐るべき病をも流行せしめ給ふなりと答ふるもありき、人の道を盡さざるによりて、種々の災害を生ずるは事實にして、かの悪疫をなすべき微菌の如きも、始めは極めて小數の不攝生者より發生して、終に災害を公衆に及ぼすに至るは、歎くべきことなれども、之を神の故意

に出づとせば、神は甚だ不仁なるものにあらざれば、痛く迂遠なるものといはざるべからず、思ふに神は「オールマイティー」なりといへるは、神は全知全能にして、知らざるなく、能はざるなしとの意にはあらずして、世の中のあらゆる良知、あらゆる良能を集めたるもの即ち神なりと述べたるに過ぎざるべし、然るを誤りて神は能はざるなしと解釋せしゆるに、忽ち事實と衝突を生じ、古來幾多の人々が、この間の消息に思ひ惑ひけん、神の靈徳偉大なりといへども、尙ほ能はざるところあるは、眼前の事實にして、喩へば兩親の慈悲は甚だ大なりといへども、尙ほ自由に其子をして聰明ならしめ、又は疾病なからしむる能はざると一般なり、人は之が爲めに、毫も神を輕んじ、或は信仰の念を薄くすべきものにあらざるなり、

## 第十二章

くさぐさの教に入るなくさぐさの

教を容れよ。

嗚呼誰か神道を宗教にあらずといふぞ、天祖深意を三種の神寶に寓して教を萬世に垂れ玉ふ、簡にして要を得たりといふべし、しかもこれ天に代り、億兆を子視して、天日嗣知ろしめすべき天皇が、皇位繼承の神寶として、相傳せらるゝは、何ぞ夫れ玄妙の法を得たるや、豊葦原の瑞穂の國は、言擧げせぬ國なりと聞く、げにも天祖の神器に寓し玉ひたる深遠の教義は、儒佛耶蘇各教の、千言萬語に優るありて、劣るあるを見ず、然るにこの道理を解せずして、我が國を教なき國の如くに思ふもあり、釋迦と耶蘇との前に俯伏することを知りて、天祖を敬し奉ることを知らざるもあ

り、神道は祖先を祭るに過ぎずと説くもあり、教とすべき經典なきゆゑに宗教にあらずと論ずるもあり、されど試みに以心傳心、不立文字の數語を考へみよ、佛教徒といへども、見識卓越なるものは、教義の悉く文字に寓すべからざることを見るや此の如し、今鏡の如く明かに、玉の如く和らぎ、劍の如く勇ましからば、釋迦孔子耶蘇の教といへども、自ら我に備はらんのみ、これぞ眞に無上の宗教なる、何ぞ必ずしも天國を口にし、極樂を筆にするをまちて、始めて宗教たるの理あらんや、

西洋の或る學者、宗教を分類して、佛耶兩教を最高位におき、神道を極めて野蠻なる種類の一に加へ、殆んど末班に列ねたり、西洋人が神道を知らざるは猶ほ恕すべし、苟も神國に生れたらんものは、豈に一日も神道を知らずして可ならんや、予は四千餘万の

同胞もろ共に、心を一つにして、神道の本旨を仰ぎ奉つり、外つ國々の教をも容れて、之を取捨活用し、着着神道の實踐に従事せんことを祈りて已まざるなり、これ豈に皇國神道の下に諸宗教を統一する所以にあらずやと、或る人この説を咎めて、子は日本人なるが故に、日本を本として立論するなり、斯くして各人みな其自國を本とせば、其結果や、笑ふべきものあらんのみと、予之に答へて曰はく、然らず予をして歐米に生れしむとも、乃至亞弗利加印度に生れしむとも、眞に皇國の神道を知らば、必ず亦この説をなすべし、予は地球上の一人として立論す、決して日本人として説を立つるにあらず、かの「ヘーゲル」の如きも、眞にこの道を知らしめなば、恐くは予と主張を同じくせしならんと、其人呆然たりき、

くさくの、教の花も、玉矛の、

五十二

道一とすぢを、踏みわけて見よ、

### 第十三章

世界の平和は、必ず皇國より起らん、

天國と淨土とは、必ず皇國より始まらん、

我が國民は、古來外つ國々より恩を受くるのみにして、外つ國々へは、恩を施したることなかりしなり、支那より儒教の恩を受け、印度より佛教の恩を受け、歐米よりは耶蘇教の恩を受く、耶蘇教といへば、目下尙ほ怪む人なきにしもあらざらん、されど、今日まで、耶蘇教徒の皇國に盡せる熱心は、實に感ずるに餘あり、耶蘇教に採るべき所なしとすれば、いざ知らず、苟も採るべき所あらば、

吾人は深くその好意を謝せざるべからず、且つや基督の善良なる徳化なかりせば、歐米は今日、果して如何なる野蠻の狀態にあるべきかを想像せよ、維新以來、わが國が歐米より得たる利益は、之を間接に耶蘇教の力に歸せざるべからず、而して耶蘇教は我が國体に合はずとは、往々國人の唱道する所なれども、こは甚しき誤解と思はる、耶蘇は神を父として之に敬事し、神の前には君臣父子も亦皆同胞なりと説きたれども、孔子が四海兄弟といへるとひとしく、人々相親しみ、相愛すべき道を述ぶるに過ぎず、なんぞ君をなみし、父を輕んじ、世の秩序を紊さんと欲せんや、子を父に反かせ、嫁を姑にそむかせ云々の語も、若し果して眞に基督の口より出でたりとせば、當時必ず爲めにするこゝとありて、極言せしものならん、敵をしも愛すること、彼が如き心より、如何ぞ故

五十三

なくして、斯かる語を發せんや、儒教と佛教とに於きても、その皇國に傳はりてより、國民を教導するに、如何に便益を與へたるかは、世人の悉く熟知する所、その恩決して少々にあらず、かく外つ國々より、受けたる恩誼に對して、皇國は何の報ゆるところありたるか、神功皇后の三韓を征し給ひしは、已むを得ざるに出でしなるべし、豊臣秀吉の朝鮮を伐てるも、勢の然らしめしところか、謂はゆる倭寇のことに到りては、殆んど史を繙くに忍びざるなり、君子國の民、却りて東洋鬼子の名を隣邦に負ふ、予は内地を遊覽し、太閤が朝鮮より分捕り來れるなりとて、誇りかに陳列しある物品を見る毎に、悚然として覺ゆず手に汗を握り、その行爲の盜賊に類せるを歎かずんばあらず、これ等を省みれば、日清戰役に三國同盟して、皇國の滿洲を占領するを、東洋の平和に害あり

とせしも、強ち無理ならぬこと、思はる、予曾て、

ふみわけて、いさ世の人に、しき島の、

まことの道は、これと示さん、

と詠じたるを、ある人聞きて、これ本居宣長翁の歌なりといひき、されどこの歌は、獨り宣長翁と予の、私有すべきにあらず、皇國の人は、皆已が心より、同じ歌を讀み出づべきなり、嗚呼四千餘万の兄弟姉妹よ、願くは心一つにして、共に天地の神靈に敬事し、身を修め家を齊へ、天祖の優渥なる恩惠と、吾人の善良なる感化を外つ國々に及ぼさんことを期せよかし、この志氣を振興して、之を子孫に傳へなば、數千年來外つ國々より受けたる恩は、報いて餘りあるに至らんこと、蓋し遠きにあらざるべし、予は世界の平和は、必ず皇國より起らん天國と淨土とは、必ず皇國より始まら

んことを信じて疑はざるなり、かの自國の徳義だに保ち得ざる國が、萬國平和會議を起し、如きは寧ろ滑稽といはざるべからず、

## 第十四章 天命

天を談すといひ、命を知るといひ、共に古より至難の事とせり、孔聖尙ほ且つ曰はく、五十にして命を知ると、然るに予今齡四十に達せず、こゝに天命を説かんは、頗る古の聖賢に憚るところなきにしもあらず、されど後生は、先賢の經驗に資するが故に、得るところ或は速かなるべきか、試みに少しく之を論ぜん、孟子曰はく、命にあらざることなし、順ひて其正しきをうくと、又曰はく、天壽不貳、修身以俟之、所以立命と、孔子曾て曰はく、命なる哉、命なる哉、

この人にして此病ありと、これ等の語を熟思せば、命を知ること必ずしも難からず、既に命を知らば、天はこの命を發するところの一元たるに何の疑をか容るべき、一元分れて二となる、一つは生々榮々の力、一つは死々滅々の力、二力互に相消長をなして、萬物の變々化々行はる、この二力を合せて天と稱し、その運行を指して命といふ、孔子又曾て浩歎して曰はく、あゝ、天我を亡ぼすと、これを前のこの人にしてこの病あり云々の語と合せ考ふれば、天は正義の士にも、悪しき病を下し、正義の士をも亡ぼすに躊躇せざるものたることを教ふるなり、その仁天の如しなぞいへる語と、矛盾するところあるを免れず、儒教は上帝の性質を説くことと明瞭ならずといふとも、誰か之を否むことを得んや、然りといへども命にあらざることなしと悟りて、ひたすら身を修め天に

事へ、上下其分に安んじ、人々其誠を盡さば、娑婆即ち浄土なり、死して何處に行かんも、同じくこの道に順ふべきのみ、今生にて未來の天國と、死後の地獄を説くが如きは、寧ろ大早計に失せりとも謂ひつべし、儒者天命の教も亦尊からずや、

因に説く、死々滅々の力之を磨こいへり、磨滅の意なり、蓋し生あるものは早晚必ず磨滅す、後には其力の恐るべきを現はさんが爲に魔の字を用ゐ、厭ふべきを現はさんが爲に惡の字を附し、死々滅々の力を指して惡魔と稱せり、生々榮々の道に反せる一切の出來事は、皆この力によるなり、或は死魔といひ或は病魔といひ、分ちて之に名づけなば、殆んど窮極なからんとす、謂はゆる魔道と稱するもの、自ら神道と表裏をなせるを深く思ふべし、

## 第十五章 時事偶感

日清戦役は皇國の國威を發揚せりと雖も、戦はずして勝つゝの優れることを思はざるべからず、臺灣を得たりとて喜ぶことなかれ、兩國數万の人々を毀損し、強ひてその領土を貢獻せしむ、我は以て快となすべきも、彼は永くその怨を忘れざらん、日清戦役は勢已むを得ざりしとなり、曲彼にありて討たざるべからざりしなり、されど役の起らんことは、之を京童の謠歌に察するも、十數年の以前より、既に明かに卜知し得べかりしに、禍を未然に防ぐこと能はずして、終に干戈を交ふるに及びたるは、知といふべけんや、殊に三國の干涉をうけて讓歩せる一事は、相手の強弱によりて、行爲を二つにせるものにして、千古の遺憾といはざるべか



らず、弱者には道を以て臨み、强者には道を曲げて譲る、男兒の爲すべき所ならんや、然かも當時に於きて、この恥辱を忍ばざるを得ざりしは、畢竟その始を謹まざるに因れり、戦後幸に意を和親に傾け、大に同情を彼に寄せ、厭ふべき童謠も全く跡を絶ちたるは、實に嘉みすべきこと、いふべし、然るに日清の事纔かに局を結ぶに先立ちて、日露の事既に禍を彼我の胸臆に根ざせり、この頃猶太人虐殺の件起るに及びて、邦人の露を罵詈すること尤も甚し、予爲めに歎じて歌ふらく、

口を極めて外つ國をのゝしることの拙さよ、猶太の民を殺し、は、いと悪むべきわざなれど、露西亞の王をさすつけれし皇國の人もあるものを、われ等は深くかへりみて、禍の門堅く守らん、

ある人之をみて、「キシチツフ」に於ける露の有様こそ人道の敵として如何に罵詈するも飽き足るべきにあらずといへるを聞きて再び

野蠻の民は討つべきか、又は徳もて化すべきか、討つべき力尙ほ足らず、化すべき徳も立たなく、なとてさわぐや皇國人、廣く世界を見渡せば、道なき國は露西亞のみか、討つべき民はなほ多し、されど野蠻の民草も、神の恵に育てるを、殺すは愛の道ならじ、彼等が心暗くして、爲すべきところ知らざるを、教へ導く國なきか、やよ皇國人かへりみて、天の使命をおもひなほ、五千萬人もろともに、誠心をふりおこし、外つ國人も玉矛の、道ある國と敬ひて、まつらふまでに、徳にすゝめや、

と歌ひしが、世人は如何に思はるか、されど道の爲には、時に身をも殺さざるべからざることあり、予曾て刺客を詠じて曰はく、

神洲風氣重英武、勿怪見機擲一身、  
盛世若時無刺客、戒他奸勇有何人、

況んや悪に敵すること勿れなごいひて、非戦論を主張するが如きは、未だ劔の徳を知らざるものとして、之を擯けざるを得ず、刀劔もと博愛の理を含めり、予は幼時より武術を修する機會に遇ふことの乏しかりしを憾みとす、男女ともに武を練りて、國民の体力を養成し、國民の元氣を振興せんは、實に目下の一大急務なるべし、

## 第十六章 實行

論語に、知之に及び仁之を守ること能はざれば、之を得るといへども必ず之を失ふといへり、凡う宗教道德の事は、如何なる名論卓説といへども、之を實行するにあらざれば、毫も益なきことなり、見よ儒佛耶蘇の典籍は、家々に藏して無價の價たれども、之を讀みて内に教ふるところを實行する人なくば、名教空しく家の片隅を塞ぎて、蠹魚の餌となるに過ぎず、更に何の益をかなさん、抑も皇國は古より、言擧げすることを尊ばずして、實行を重んぜり、故に忠孝仁義等の道ありて、忠孝仁義等の言なし、儒教傳來して之を察するに會心の言多し、即ち採りて斯の道の助となす、佛教傳來して之を閱するに會心の言多し、即ち亦採りて斯の道の助となす、耶蘇教傳來して之を察するに會心の言多し、即ち亦又とりて、斯の道の助となす、一藝一術の末に至るまで、四海の貢獻

するところ、悉く採りてわが用となさざるはなし、是れ謂はゆる人によりて善をなすを樂しむもの、以て神道の廣大なるを証するに足れり、況んや儒佛兩教が、その本國に於けるよりも、却りて皇國に於きて實行さるゝこと多く、耶蘇教も皇國に來りて、漸くその真相の發揮せられんとする勢あるを見ば、誰か神國の名偶然にあらざることを思はざるものぞ、或は皇國に大哲學者、大宗教家出でずとて、慨嘆するもあれど、かの釋迦孔子基督の如きは、無道を救はんが爲めに、必要に應じて、その時その處に現はれしものにして、皇國は古より道の絶滅すること、然かく甚しきに及ばず、畏くも天祖の御遺訓は、三種の神寶に寓せられ、天津日嗣知ろしめす天皇之を体して上に君臨し給ひ、これ等の人物の出現の必要を感じること少なかりしなり、これ實に皇國の一大幸福

といはざるべからず、今や明治の盛運は日進月歩、世道人心漸く新たならんとするに當り、殊に要するところのものは、議論にあらずして實行にあり、言多きは品少しといへる諺、淺き瀬にこそあだ波はたてと詠ぜし古歌など、思はざるにはあらねども、二十餘年來切に求めて、忘るゝこと能はざりし神の道、この頃漸く明かに、恰も雲霧を披きて、青天白日を覩るが如き感あり、之を今日の世態に鑒みて、默視するに忍びず、身にとる業務の忙はしきをも忘れ、述べて以て世人の注意を惹起せんとするに及べり、

老いくれし、今の心を、こゝろにて、

身はいにしへに、かへしてしかな、

とはたれか讀みけん、予なほ老いくれしとはあらねど、道を悟ること遅くして、修養の足らざりしを今さら歎くも甲斐なし、せ

めては之を江湖に告げて、後進の人々にも、速かに斯の道を知らしめ、皆共に天地の神靈に敬事せまく欲するなり、然らざればいかなる學事に従ひ、いかなる職業に就くとも、其の勢力の微なること、地に根ざらざる草木の如く、泉に本つかざる池水の如くなるべし、故に次章に於きて、神道の實踐に裨益すべき、方策を陳ぶること、せり、

### 第十七章 無名會

人は直に神を知り、常に之に敬事する心を有するにあらずんば、未だ其の人を信すべからず、佛教徒は阿彌陀に歸依し、儒教徒は天の命に服従し、耶蘇教徒は「ゴッド」に敬事す、各其敬事する所ありて、心の守始めて固く、死生其の信する所に任せて他念なし、聞

く西人常に無宗教のものを危みて、殆んど信用せずと、誠に宜なりといふべし、然りといへども、謂はゆる迷信は、吾人の採るべきところにあらず、夫れ神明を敬して、之に事へまつるは、皇國固有の大道なり、忠を尊ひ、孝を重んずるも、神明の攝理、自ら然らざるべからざる理ありて存すればなり、故に神明に敬事すれば、忠孝仁義の心油然として生ず、古語に曰はく、忠臣は孝子の門に求めよと、予は謂へらく、忠孝の道は神明に敬事するによりて益弘まると、故に一つの會を組織して、四千餘万の同胞悉く斯の道の實行に裨益すべき方法を計畫し、本年二月十一日、紀元節の佳辰に當り、伊勢の大廟に詣で、恭しく之を天祖に奉告して、普く之を國內に勧誘せんとつとめたり、左に其奉告文、宗教統一の歌、勧誘書、並びに無名會の趣意規則等を列舉せり、今や神洲の士民、舉りて

道を修むるに厚く、徳を養ふに急なり、願くば予が誠意の存するところを察して、苟も採るべきあらば、之を容るゝに吝ならざらんことを祈る、

### 奉告文

かけまくも畏き、天照皇大神の靈前に申さく、臣久吉謹みて考ふるに、皇國宗教の道未だ全く明かならず、儒佛耶蘇各教徒、互に其信念を異にするのみならず、更にくさくの教義多く世にひろまりて、人々往々其歸依すべき所に惑ひ、學識あるものだに、時としては何れの教義にも心をゆだねず、自ら無宗教と稱へ、大神の遺訓顯然たりと雖も、之を眞に知り、實に行ふこと能はざるもあり、罪惡日々におこり、裁判警察監獄等の忙はしきこと、殆んど云

ふに堪へず、臣久吉竊かに深く之を憂ひ、夙に神教を世に明かにせんとの大願を發し、今を去ること八年、明治二十九年の春、恭しく靈前に詣て、必ず爲すことあらんと誓ひしも、時機未だ到らず、才徳尙ほ足らず、却りて一身の不幸を醸し、以て今日に及べり、其間沈思熟慮、天地神靈の優渥なる御恵を蒙り、直接に間接に世人の深厚なる助力を得て、こゝに無名會を組織し、之を實地に試みて、其利益洪大に、其功德無限なることを証するを得、臣が寓居の市内近村には、既にこの會の成立せんとするもの三四を見るに到りぬ、即ち別紙印刷物を作り、弘く勧誘して、普く之を皇國の内に實行し、神洲の士民舉りて神明に敬事する道を辨へ、彌々徳を修め、益々業を勵み、文明かに武備はり、遂に國內に一訴訟なく、一罪人なからしめ、日の本の名空しからず、世界億兆の蒼生をし

て、目之を見、耳之を聞き、心に悦服し、皆共に天津日嗣しろしめす  
 天皇の恩澤に浴せんことを希ふに到らしめ、地球上を一家とな  
 し、ひとしく大神の御遺訓を仰ぎ、無窮の幸福を享受せしめんと  
 欲することを、畏み畏み靈前に告げ奉る、

### 宗教統一の歌

静かなる人の心は、くもりなき鏡の如し、世の中のよきとあしきを  
 を明かにてらしめ、あちて、人ごとになすべきわざを、朝なゆふな  
 樂しみつとめ、家のうち睦じくして、ひろく世の人と物とを、いつ  
 くしみかつはあはれみ、天地の神につかへて、現身のあらんかぎ  
 りは、よきことをつとめおこなひ、かりうめのわざといへども、あ  
 しきをば深くいましめ、つらぎ太刀身にうへもちて、つかのまも

つとしみはげめ、身のほどのたかきいやしき、その家のとめる貧  
 しき、老いたるも若きもありて、なすわざは千々にかはれど、かは  
 りなき道ひとすちを、ふみわけて神よりうけし、まどかなる心の  
 玉の、うるはしきひかりあらはせ、もろこしのひじりの教、釋迦牟  
 尼や耶蘇基督の、説とて、もうのおほむねは、この道になごかたが  
 はん、過ぎし世はいへどかひなし、今の世をかくてをへなば、後の  
 世のことわりとても、いかでこの外にはいでん、千早振る神代の  
 むかし、すめぐにのあまつみおやは、この道を三つの寶に、あらは  
 して教をよゝに、たふとくも残したまひき、もろともに神のみま  
 へに、けふもまたいざやたのしく、人の道かたりあはさん、神の道  
 たへまつらん、いざやたのしく、

くもりなき、人の心は、いにしへも、

勸誘書

拜啓、彌御清祥、慶賀奉り候、さて耶蘇教國にて、日曜日毎に必ず會堂に集まり、教を聞きては心をすまし、祈禱をなしては行を清くせんとするは、實に感すべきことに候はずや、皇國は他邦にすぐれて尊き國体なれば、上も下も古より道德を重んじ、節義を尊び、風俗自ら純美なりしといへども、動もすれば悪心萌しやすく、誠意欠けやすきは、人の弱點なれば、直情徑行して平素反省するところなきときは、人心自ら遊惰放逸に流れ私利我欲に長じ純美の風必ずしも永存するものにあらず、日曜日毎に業を休みて會合し人にも聞き自らも省みて互に風教を維持せんとつとむる

は耶蘇教徒にあらずとも人たる者に必要の事と存せられ候一郷一村必ず公會堂の設あるべきは今更論ずるを須るす各鄉村の人々日曜日毎にこゝに會して名士を聘し道德上の説話を聽聞するは誠に願はしき事にこそ候へ小生は昨年来無名會といふを組織して差支なき限りは日曜日毎に家族並びに隣人を會して修養上の談話に時をうつすを常とす其の間得るところ實に少々にあらず今左に其の趣意規則並びに歌を録して貴覽に供へ御家庭にても御始め遊はさるゝやう御勸誘申上げ候若し夫れ會する人なきときは一家庭數名にても會は成立つべけれやんごとなき竹の御園生よりかずならぬ賤が家の庭にもひとつにしき弘むべきことゝ存じ候小生方にては午前九時に奏樂無名會の歌を唱へ九時四十五分まで談話をなす九時四十五分

に奏樂金剛石の御歌を唱へ十時十五分まで三十分間休憩し或は別室に行きて茶を喫し或は園庭に出で、逍遙す十時十五分より十一時まで再び談話をなし十一時に奏樂君が代の歌を唱ふることに二回にして解散するを例とせり其方法は固より一定すべきにあらず奏樂唱歌の如きも其の人々の選擇にまかせ時々變更するも興あるべしと存じ候會の歌のうちにいへるところの神に事ふる一事は目下之を解する人少きやに覺え申し候我が國は古より神國と稱して敬神の道をさく疎からぬ風習なりしも神に對する觀念次第にうすらぎ今世眞に敬神の念あひき人は曉天の星も畜ならぬまで少くなれるは實に悲むべき極みに候はずや或る人は神はなしと論ずれどもこの世の中には髓かに人間以上の偉大なる能力あることは花の咲くを見て

も動物の生ずるを見ても疑を容るべからざるところにしてこれ即ち神の力に候ある人はこれ自然なり神にあらずと申し候へどもその自然の力はまさしく吾人の尊崇すべく畏敬すべき力に候へは之を神と呼びて之に事へまつるは固より然るべきことにて斯くてぞその分靈たる數多の神々をも敬する心は自ら起り得べき儀と存じ候由來敬神は道の大本に候へば何卒もろともにこゝに意を留めたきことに候敬具

あきらけき鏡のまへにくさぐさの

教の道をうつしてぞ見ん

ちはやふる神を敬ふこゝろこそ

誠の道のもととなりけれ



無名會趣意並に規則十ヶ條

七十六

第一條

凡そ世間の人々は、皆この會員と見做し、日曜日午前九時より十一時まで、各處に會合して、皇國神道の本旨に基づき、儒教佛教耶蘇教等の別なく、一切の善き教を、和樂の裡に研究し、直ちに之を實行の資とするを趣意とし、乳を求むる幼兒等も、父母の膝下に伴ひてこの會に出席し、自然に善良なる感化を享けしむべし、

第二條

會場は各人の家庭、又は篤志者の喜捨に成れる、各市町村の會堂とす、而して會場の内外には、なるべく會員を益し且つ樂ましむべき設備をなすべし、會堂既に成るに及びては、堂内正面に、明鏡利刀寶玉(天祖の御遺を安訓を表す)を安

置し、左右に大國主神(大義尊皇の意を表す)、釋迦(佛教を表す)、孔子(儒教を表す)、耶蘇(基督教を表す)の畫像を掲ぐべし、畫像はなるべく、眞に近き想像畫を撰むを要す、

第三條

會員は六日間、各自の職分を樂しみ勵み、日曜日にはなるべくこの會に出で、終日業を休みて、一家の和樂をばかり、心身の安息をなすべし、

第四條

會員は和樂して、其の職分を勵み勤むるのみならず、必ず天地の神靈に合体し、常に一切衆生の幸福を願ひ、とめ、悪人又は已れに敵するもの、爲めをも思ひやり、宇宙(古往今來)を以ておのが身命と心得、若し避け得べからざる禍害の來るに及びては、區々たる五尺の身命には、毫も心を動かすことなく、安心堅固なるべし、

七十七

## 第五條

各人の家庭は勿論、軍人學生職工等、各團體に於きても、この會を組織して、日曜日の洪益を擧ぐべし。家族又は友人を誘導して會合すべし、但し差支あらば、欠席するも、遅刻するも、更に妨なしとす。

## 第六條

音樂を以て始め、音樂を以て終り、中間にも成るべく音樂を交へて和樂を助け、互に有益なる談話、又は講演朗讀等をなし、時々相當の講師を招請して、其の說を聽聞すべし。

## 第七條

會員は時ありて、新たに神聖なる經典詩歌を述作して、この會の趣意を助くべし。

## 第八條

會員は、身分に應ずる程度に於て、服裝を互に人よりも、質素にせんと心がくべし。

## 第九條

大なる市府は、之を若干區に分ち、各區に一會堂を設立すべし、而して學識德行世の師表たるに足るべき人物數名を擇みて會堂の監督となし、斯の道教導の任に當らしめ、東西兩京の中央會堂には、特に附屬の學校を設けて、全國各會堂に監督たるべき人物を養成すべし。

## 第十條

會堂の監督は常に其會堂區域内の罪人の數、并に種類を調査して、罪人あるを己が恥辱と心得、放免せられて家に歸るものあらば、特に之を導きて、一定の職業に安んぜしむることを勤むべし、且つ平素一般民衆の模範地方行政官の師友となり、以て其地方の風教を維持すべし。

無名會の歌

ハ調

2-1 2	3 3 5 5	3 3 5 5	6-0
イートモ	タフトキ	カミノミ	チー
すーぎし	むいかの	つとめに	はー
ヲシヘノ	ミーチヤ	ムカシイ	マノー
しーじの	けしきや	やまかは	のー
i-i 2	6 6 5 3	6 6 5 3	2-0
ホメタ・	へーツ・	ケフモマ	ター
たらはぬ	ふーしや	なかりけ	んー
カミト	スーベキ	ヨノヒト	ノー
おーのづ	からなる	さまみて	もー
2 2 i i	2-7 7	6-5 5	3-5-
サイハヒ	オーホク	アーツマ	リーテー
こゝろと	みーとを	かーへり	みーてー
ヨキオコ	ナーヒヲ	カータラ	ヒーテー
たふどき	かーみを	うーやま	ひーてー
3 3 5 5	6-5 3	2 2 2 1	2-0
シクシム	ユートノ	ウレシサ	ヨー
こんむい	かーをば	いましめ	よー
ムーツブ	マト井ノ	タノシサ	ヨー
つかふる	みーちに	こゝろせ	よー

いと尊き神の道はめたふへつ、今日もまた、幸ひ多くあつま  
 りて、親しむことのうれしきよ、過ぎし六日のつとめには、足らは  
 ぬふしやなかりけん、心と身とをかへりみて、來ん六日をは戒め  
 よ、教の道やむかし今の、鑑みとすべき世の人の、よき行をかたら  
 ひて、睦ぶまとの樂しさよ、四時のけしきや山川の、おのつから  
 なるさま見ても、尊き神をうやまひ、事ふる道にこゝろせよ、

第十八章 五十鈴川の歌

五十鈴川の水清き畔、古松老杉森々として蔭をなせる處、素朴の  
 神社屹立して、長へに天祖天照皇大神の威靈を奉祠せらる、これ  
 實に神道教祖の靈殿にして、亦皇室御祖先の大廟なり、警視あり  
 日夜交替、眼をはなさずして之を守護し奉り、近づく者をして、敢

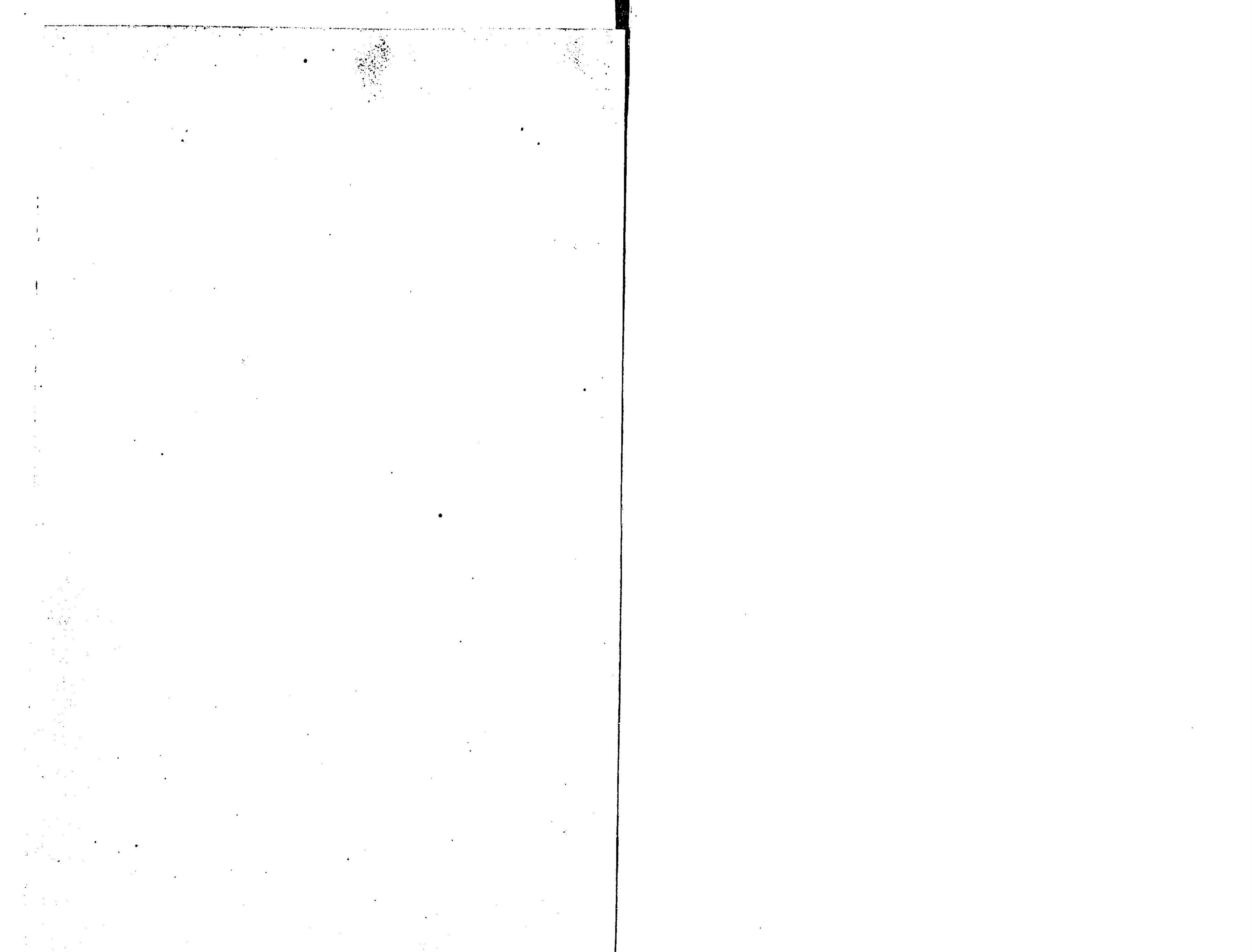
て或は非禮の過なからしむることに注意せり、皇國の民誰か之を尊び仰がざるものあらんや、天祖の靈德尙ほ未だ万邦に洽ねきに到らずといへども、世界億兆の蒼生が均しく仰ぎまつりて、その恩澤に浴せんことは、蓋し遠きにあらざるべし、今を去ること七年、予は東都の大學にありしが、悠々として教授諸氏の講義を聽くに堪へず、遙かに歩を運びて、恭しく靈前に詣で、大に神教を世に明かにせんと自ら誓ひ、五十鈴川に手洗ふにあたりて、

五十鈴川、流るゝ水に、のぞみても、  
洗ふつみなき、こゝろともがな、

と詠せしが、時機未だ到らず、才德尙ほ足らず、却りて一身の不幸を醸し、今日に及びぬ、今年二月十一日、紀元節の佳辰に、重ねて靈前に詣で、意中を奉告し、五十鈴川にのぞみて、七年の昔を回顧し、

欠

MISSING



1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100